

注) \*印の欄は、年度末に記載予定

## 2022年度 京都教育大学附属京都小中学校 学校評価

| 自己評価区分 |              |
|--------|--------------|
| A      | 十分達成できた      |
| B      | 概ね達成できた      |
| C      | 十分には達成できなかった |
| D      | ほとんど達成できなかった |

### ② 附属学校園の機能向上に関する事項

| 本年度の重点目標                   | 具体的な取組内容  | 自己点検評価   | 自己評価区分 | 学校関係者評価  | 改善策  |
|----------------------------|---|--|--------|--|--|
| (1) 教育研究活動の成果の公表           | ①教育創生リージョナル機構との共催、京都府・市教育委員会との後援により、研究発表会を開催する。<br>②大学の「大学紀要」「センター紀要」等に積極的に投稿するとともに、大学が設立した義務教育学校懇談会で研究成果を公表する。                               | ①京都府・市教育委員会の後援を受け、研究協議会を2日間の対面式(3年ぶり)で実施した。<br>②大学が設立した義務教育学校懇談会において、本校の実践を発表し、各校の課題を共有することができた。   | A      | ・研究協議会を実施できたことはよかった。しかし広報的にもっと発信すべきであった。京都市・京都府へのアプローチも大切にしていけることが必要。                              | ・研究協議会の一次案内・二次案内を早めに作成し、広く伝えていく。<br>・申し込みのしやすい、チラシにQRコードを添付するなど広報のやり方自体を工夫していく。    |
| (2) 大学と附属学校園とが連携した研究の実施    | ①大学の「先端技術の効果的な活用に関する実証研究事業」について、授業実践やデータ蓄積に参画する。<br>②大学教員や各附属学校園の教員と協働して、義務教育学校教育課程研究に継続して取り組むとともに、大学各学科研究や「教育研究改革・改善プロジェクト経費」による研究に積極的に参画する。 | ①大学の「先端技術の効果的な活用に関する実証研究事業」について校内授業実践を通じて積極的に参画した。<br>②大学の義務教育学校専門委員会と連携して、義務教育学校の教育課程について授業実践と教育効果の検証を実施した。授業分析を行う各教科部会には本校教職員が所属し、活発な研究が行える組織をつくることができた。 | B      | ・大学との連携については積極的に行っていた。附属間の交流・連携については、各教科・分掌においてさらに密にできる取り組みを期待したい。                                 | ・授業実践やデータ蓄積をもとに、まとめ方などさらに大学と密に連携をしながら進めていく。<br>・全国の学校で取り組み可能な汎用性のある研究になるように推進していく。 |
| (3) 総合教育臨床センター学びサポート室との連携  | ①総合教育臨床センター学びサポート室共同実践者を選出し、参画する。<br>②学びサポート室と本校特別支援学級研究との連携を図る。  | ①共同実践者が窓口となり、初等部1名・中高等部1名を対象に事例研修を行った。<br>②困りごとに焦点を当て、多角的かつ継続的な支援の在り方について、共同研究を行った。  | A      | ・子どもや親の「困りごと」に着目し、個に応じた支援の在り方を共同的に考えることができた。<br>・サポート室との連携を広く教職員にも、伝えていく必要がある。                     | ・学びサポート室との連携を密にし、また共同で行っていることを広く教職員に研修する機会を設ける。                                    |
| (4) 業務改善及び教職員の働き方に関する取組の推進 | ①校務の効率化・情報化とともに、学校行事や教職員の役割分担を見直し、学校業務の適正化を図る。<br>②部活動の在り方について検討し、順次実施する。   | ①教員業務の効率化を図るために、Teamsなどを活用し、情報共有を行った。またノー残業Dayの徹底を図った。<br>②部活動運営方針に基づき、生徒教員ともに負担のない活動を進めた。   | B      | ・教員の業務については、俯瞰的に見ていく必要がある。時間をかけるところと精選していくところを、この機会に見定めることが大切。<br>・部活動の在り方は、情勢を考えても縮小方向でよいのではないかと。 | ・分掌に偏りがでないように、企画運営での連携を密にし、義務教育学校として東西エリアの業務がスムーズに行えるように取り組んでいく。                   |